

6. 小島憲之 (1962) 『上代日本文学と中国文学 出典論を中心とする比較文学的考察』 塙書房, pp. 241
7. 小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』 ひつじ書房, pp. 259-280
8. 小林芳規 (1964) 「万葉集における漢文訓読語の影響」 『国語学』 58
9. 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版社, pp. 328
10. 福島直恭 (2008) 『書記言語としての「日本語」の誕生——その存在を問い直す——』 笠間書院, pp. 51-62
11. 山口佳紀 (1989) 「万葉集の用法と上代漢文訓読語——副詞についての考察——」 『論集上代文学』 17
12. 山田孝雄 (1930) 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』 宝文館, pp. 81-96

上代の接統詞「しからば」の発生について

とは、接続詞の発生に見過ごしにできないが、これらの点については、別稿に譲りたい。

注

- ① 池上 (1947) では、中古語には明確な接続詞はなかったと述べている。また、福島 (2008) は、中古和文における「接続詞の使用の少なさ及び種類の少なさ」を指摘した。
- ② 口語訳は澤瀉久孝 (1957) 『萬葉集注釋』(中央公論社) に基づく。
- ③ 本稿で取り上げる大系本『古事記』の用例は、高木市之助、富山民蔵 (1977) 編『古事記総索引』(平凡社) の諸本校合によると、漢字表記「然者」「然」とその訓読「しからば」は、『敷田年治標注本古事記』を除くすべての諸本と一致している。また、『日本書紀』の例について、石塚晴通 (2007) 『尊經閣文庫本日本書紀本文・訓点総索引』(八木書店) で「然則」の訓みが確認できるのは次の1例である。「然則」は「シカラバ」と訓まれ、「則」は訓まれない。
 - ① 然ラバ則一宵に喚(メシ)二幾(イ)-(ク)廻(タヒ)乎(ヤ) (巻14-65)この他、次のように、「然」の後に「は」のみを振っている例もある。
 - ② 然は則百濟、欲は新に造國を、必先、以女(メノコ)-人小子(ワラハ)を一て載船一て而至(マウイタ)む (巻20-139)
- ④ 『漢籍全文検索系統』を調べた結果、専ら「若然(者)」の形であり、「然者」の形は見られない。
- ⑤ 訓点資料の調査には、大坪併治 (1961) 『訓点語の研究』風間書房、大坪併治 (1993) 『改訂訓点語の研究 下』風間書房、春日政治 (1985) 『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』勉誠社、曾田文雄 (1960) 『興聖寺大唐西域記卷十二併読解文』『訓点語と訓点資料』第十四輯、曾田文雄 (1961) 『興聖寺大唐西域記卷十二併読解文——『贊』以下の部——』『訓点語と訓点資料』第十五輯、築島裕 (1965) 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古点の国語学的研究』東京大学出版会、中田祝夫 (1954) 『古点本の国語学的研究』講談社、を利用した。
- ⑥ 仏典における「もししからば」という意味を表す漢字列「若然者」の「者」は実質的な意味が含まないため、仏典の中では「若然」の形で用いられることがある。
- ⑦ 「若然者」のような当時の口頭語或は俗語が、漢籍、特に韻文に現われにくく、仏教資料、特に漢訳仏典に盛んに使用される。ただし、仏教が中国に伝わった漢の時代から、古代中国語も仏教語に強く影響されたため、後の時代の漢籍において、「しからば」の意を表す「若然者」も現れてきた。
- ⑧ 清瀬 (1955)、小林 (1996) では、室町時代の作品を扱って、それらに見られる「さらば」に関する考察を通して、後続文には意志表現と命令表現の偏りを有するという結論を出している。

参考文献

1. 池上禎造 (1947) 「中古文と接続詞」『国語国文』15-12
2. 牛島徳次 (1967) 『漢語文法論 (古代編)』大修館書店、pp. 378
3. 牛島徳次 (1971) 『漢語文法論 (中古編)』大修館書店、pp. 412
4. 王力 (1992) 『中国古典読法通論』朋友書店、pp. 162-163, 178
5. 清瀬良一 (1955) 「天草本平家物語の接続表現——『さらば』などの場合について——」『広島大学文学部紀要』8

表現が続く。(25)の後続文は、「もしそれならば、廃毀がないように願いたい」という意味で、〈意志〉表現が続く例である。(26)の後続文は、「もしそれならば、馱那羯磔迦国城南山岩執金剛神の所へ行くがよい」という意味で、〈命令〉表現が続く例である。

表五からわかるように、漢訳仏典『阿毘曇毘婆沙論』以外の中国撰述仏教資料に見られる「若然者」の例はさほど多くないが、接続詞的用法であることが確認できる。「若然者」は「もししからば」という意味で、もとは条件句のようなもので、固定化したパターンに用いられ、次第に慣用化して、会話文あるいは問答文の文頭に現れ、疑問表現と推定表現を主として導く接続詞として用いられている。

以上、漢籍と仏典において「しからば」と訓まれるものについて考察してきた。『日本書紀』や訓点資料と同様に、漢籍の「然則」と仏典の「若然者」とはいずれも疑問表現と推定表現に偏っており、特に疑問表現の例が中心的であることが確認できる。また、「もししからば」の意を表す接続詞的用法の「若然者」はもともと漢籍にはなく、漢訳仏典に特有の用法と考えられる。^⑦

5 おわりに

以上、上代文献、および訓点資料、漢籍、仏典における「しからば」の用例を検討した。

「しからば」の後続表現から見ると、『日本書紀』に見られる「然則」「然即」の後続表現は、疑問表現と推定表現の例が中心的であった。これは漢籍の「然則」や仏典の「若然者」の使用状況と一致している。一方で、『萬葉集』の仮名書きの例は疑問表現をとっているが、『古事記』では、「しからば」は「然者」の形で用いられ、後続文には意志表現と命令表現に偏る特徴が見られた。このような『古事記』の傾向は、『萬葉集』の例も含めて、日本において独自に生じた接続詞用法と考えられるのではなからうか。

平安時代になると、「しからば」は漢文の「若然者」「然則」などの訓読に用いられ、漢文訓読語と意識され、現代日本語にまで引き続き使われている。もともと「しからば」は上代の日本語に自然に生じたもので、文体的な特殊性を帯びず、後続表現にも広がりを持つものであった。それが平安時代以降、漢文訓読文に使用されるようになること、後続文に推定表現を続ける用法も生じ、また、後続表現が次第に疑問表現に固定化していったものと考えられる。

本稿では、『古事記』の「然者」(しからば)が意志表現と命令表現に偏っていることについて指摘したが、筆者は和文の「さらば」^⑧に、このような用法が受け継がれたと予測している。また、「しか」系接続詞の「しかれども」も『萬葉集』に既に見られるこ

表五 仏典における「若然者」

資料 後続文	阿毘曇毘婆沙論	大唐	法苑	妙法	玄論	義疏	遊意	計
意志表現	0	1	0	0	0	1	0	2
命令表現	0	2	1	0	0	0	0	3
疑問表現	347	1	2	0	0	1	1	352
推定表現	19	0	0	1	2	1	0	23
計	366	4	3	1	2	3	1	380

述べた。この点を確認するために、『SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース 2012 版 (SAT 2012)』を調べた結果、「若然者」が951例見出された。ここでは、そのうち、六朝時代の漢訳仏典『阿毘曇毘婆沙論』と隋唐時代の中国の僧侶たちが撰述した『大唐西域記』『法苑珠林』『妙法蓮華經玄義』『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』における用例を調べた。その後続文の表現によって整理した結果を表五に示しておく。

上記作品の総計380例中の366例が漢訳仏典『阿毘曇毘婆沙論』に集中的に現れる。

(21) 問曰、若然者、聖人何以修道耶。(『阿毘曇毘婆沙論』)

(22) 問曰、若然者、佛阿毘曇何者是耶。(『阿毘曇毘婆沙論』)

(21)の後続文は「もしそれならば、聖人は何によって道を修するのか」という意味で、(22)の後続文は「もしそれならば、佛阿毘曇とは何者であるか」という意味である。これらの例において、「若然者」の前には「問」字があり、後ろには「何以」「何者」のような疑問詞や疑問助詞の「耶」が続くパターンが決まっている。同じような構造は『阿毘曇毘婆沙論』に347例ほど見られ、〈疑問〉を表す最も典型的な文型であると考えられる。また、隋唐の經典においても同じように、疑問表現に偏る傾向が見られる。

(23) 法出諸佛，法生佛道。若然者，何不先念法後念佛耶。(『法苑珠林』)

(23)の「若然者」の後続文は、「もしそれならば、なぜまず法を念じてから仏を念ずることをしないか」という意味で、〈疑問〉表現が続く例である。

一方、次のように、後続文で推定表現、意志表現、命令表現を取っている例もそれぞれ23例、2例、3例見られるが、特に推定表現が比較的によく見られる点が注目される。

(24) 有覺有觀，無覺有觀。若然者則違經文。(『阿毘曇毘婆沙論』)

(25) 龍曰、若然者願無_レ廢毀_一。(『大唐西域記』)

(26) 菩薩曰、若然者宜_レ往_一馱那羯磔迦國城南山巖執金剛神所_一。(『大唐西域記』)

(24)では、前文の「有覺有觀，無覺有觀」を受けて、「若然者」は「もしそれならば」という意味を表し、後続文に「(その説は) 經文と違うことになろう」という〈推定〉

表四 漢籍における「然則」

資料 後続文	論語		孟子		莊子		淮南子		史記		計
	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	文頭	文中	
意志表現	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
命令表現	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
疑問表現	2	0	13	5	14	3	2	1	10	5	55
推定表現	0	0	4	2	5	0	0	2	0	8	21
計	2		24		22		5		23		76

上代の接続詞「しからば」の発生について

の意味に用いられないことがわかる。

(19) 君子明於此十者，則韜乎，其事心之大也。沛乎，其為萬物逝也。若然者，藏金於山，藏珠於淵。〈君子は此の十者に明かならば，則ち韜乎なり，其の心を事むることの大なるは。沛乎たり，その萬物の逝と為るは。然るが若き者は，金を山に藏し，珠を淵に藏す。〉（『莊子』外篇天地第十二）

(20) 此真人之道也。若然者，陶冶萬物，與造化者為人。〈此れ真人の道なり。然るが若き者は，萬物を陶冶して，造化者と與に人為り。〉（『淮南子』卷二俶真訓）

(19)の前文は以上の十の徳を有する君子のあるべき様を描写している。「若然者」は前文の「君子」を指して，後続文には「このような人は，金は山にあるままにしておき，珠は淵に沈んだままにしておく」という内容が続く。(20)の前文は，「真人之道」の真義を述べている。「若然者」は真人の気品が備わる人を指して，後続文には「このような人は，萬物を陶冶して，造化者と仲間となる」という内容が続く。これらの「若然者」は全体が一個の名詞に相当する連語となって，「然るが若き者」と訓み，「このような人」という意味を表わし，後続文の述語の主語となっている。したがって，漢籍における「若然者」の「者」は王（1992）が指摘した「行為の主動者を指代する用法」であり，「若然者」は前述した接続詞の用法ではないことが確認できる。

以上のように，「然則」には「しからば」と解される例があり，後続文には疑問表現と推定表現に多く，特に疑問表現に偏る傾向が極めて強いことが確認できる。一方，漢籍では「若然者」はあるが，接続の用法の「しからば」と解される例は見られない。「しからば」という意を表す「若然者」は，漢籍には見られなかったが，仏典を中心とした訓点資料に見られることがわかった。

一九二

4.2 仏典における「若然者」

前節では，「しからば」という意を表す「若然者」が仏典に専用されるということをも

と「中古編」に用例として挙げている。この牛島の記述によれば、「然則」と「若然」は同じ順接の接続詞であるが、「然則」は「若然」より古い用法として理解される。

中国側の漢語学者として、王（1992）では、「者」について、語気詞の「者」は假定分文（仮定句）などの後に用いられて停頓を表す用法と、動詞の後に用いられて行為の主動者を指代する用法があるといい、また、「然則」の用法は、「如此、就……〔このようである。それならば……〕」という意味と同じであると述べている。

以上のように、正格漢文における「若然者」と「然則」は、いずれも順接の接続詞として、「しからば・それならば」という意味を表すことがわかる。

4.1 漢籍における「若然者」と「然則」

本節では、『漢籍全文検索系統』第4.20版（陝西師範大学）を利用して、春秋戦国の『論語』『孟子』『莊子』、漢魏六朝の『淮南子』『史記』を資料として取り上げ、「若然者」と「然則」の漢籍における用法を確認しておく。訓読文は『新釈漢文大系』（明治書院）による。

まず、漢籍における「然則」の用法について検討する。表四の示したように、「然則」の後続文の内容は疑問表現と推定表現が多いことがわかる。

- (17) 子貢問、師與商也孰賢。子曰、師也過。商也不及。曰、然則師愈與。〈子貢問ふ、師と商とは孰れか賢れると。子曰く、師や過ぎたり。商や及ばずと。曰く、然らば則ち師は愈れるかと。〉（『論語』先進第十一）
- (18) 則秦魏之交可錯也。然則魏必凶秦而奔儀、收韓以相衍。〈則ち秦魏の交はりをば錯むべし。然らば則ち魏は必ず秦を凶りて儀を棄て、韓を收めて衍を相とせん、と。〉（『史記』張儀列伝第十）

(17)は孔子と子貢の対話である。孔子の「師はまさっているが、商はそれには及ばない」という話に対し、子貢は「それならば、師のほうがまさっているわけでしょうか」という〈疑問〉を出した。(18)は「秦と魏の交わりを進展させないようにできる」という前提を受け、「そうするならば、魏はきっと秦を伐つべく張儀を見捨て、韓の味方として衍を宰相に任ずることでしょう」という強い〈推定〉が続く例である。上記の2例は、いずれも「それならば・そうするならば」の意で、強い因果関係を表す順接の接続詞である。

次に、「若然者」では、『漢籍全文検索系統』を調べた結果、『莊子』に14例と、『淮南子』に8例と、集中的に現れ、いずれも下記のように「然るが若き者」という意に用いている。したがって、前漢までの漢籍に限ると、「若然者」は「サフデアルヨフナレバ」

世に張李の^リマクスシ(の)〔之〕道を學するは本は治一頭と〔及〕鬼卒とに名(づけ)たり。後に佛法の道士の〔之〕名を^{ぬす}盗み取(れ)り〔也〕。(『法華義疏序品初』(478))

(15)の「然(ら)ば則(ち)」は前の文脈を受けて、「そうであるならば、一乗と三乗の駕は、いかにしてその轍をもって同じくすることができようか」という〈疑問〉を続けている。(16)の「而(ら)ば即(ち)」の前文では、「道士」という呼称は元は菩提薩埵の訳であることを述べている。それを受けて、「そうであるならば、道教を学ぶ人がもとは治頭と鬼卒とに(道士と)名づけたのだが、これが後に仏法の道士の名を盗み取ったとされたのだろう」という〈推定〉を述べる。

以上のように、訓点資料における「しからば」は「若然(者)」「若爾」「然則」「而即」などの訓読に用いられる。後続文には意志表現が1例あるが、疑問表現と推定表現が多く見られる。この点では、『日本書紀』に見られる「しからば」の用法と共通している。

4 「若然者」と「然則」の語義

前節では、「しからば」の上代文献と中古訓点資料における用法を比較して見たが、訓点資料の仏教語の口語性と集まった用例の少なさを配慮し、正格漢文における用法を確認する必要がある。そこで、ここでは、『日本書紀』で「しからば」の訓が宛てられた「若然者」と「然則」の中国正格漢文における用法を検討する。

まず、「若然者」と「然則」の語義について、江戸時代の漢学者は、次のように記述している。引用は『漢語文典叢書』(汲古書院)による。

「若然者」 サフデアルヨフナレバ(『助語審象』橘園三宅口授、釋海定等編、1817年)

「然則」 其事理^シ如^{カク}此^{コト} サフアル時ハカクノ如クアルハヅト轉シテ下文ヲソコヘ引^{ヒキ}出^{イダス}ナリ但シ論語先進ノ篇云今由^ト與^ト求^ト可^シレ謂^フニ具臣^ト矣然^{ラハ}則^ト從^ハレ之^ニ者^カ與^トアル此^ノ時ハ下ニ疑問ノ詞ノ與^トノ字アルユヘシカラバトヨムテニハナリ(『語助譯辭』松井河樂編、1679年)

上記によれば、「若然者」は「サフデアルヨフナレバ」という意味である。「然則」は「サフアル時ハ」の意で、下文に「カクノ如クアルハヅ」と強い推定を導くというのであり、後続文に「疑問ノ詞ノ與ノ字アル」時は「シカラバ」と訓むべしと述べている。

また、牛島(1967)(1971)では、「文の接続」を表す用法の一つとして、「肯定的な経過」の用法を挙げ、その代表的な詞として、「然則」と「若然」をそれぞれ「古代編」

表三 訓点資料における「しからば」

表記 後続文	「若然(者)・若爾」		「然則・而即」		計
	文頭	文中	文頭	文中	
意志表現	1	0	0	0	1
命令表現	0	0	0	0	0
疑問表現	3	0	0	1	4
推定表現	1	1	0	1	3
計	6		2		8

それらの用法と上代の「しからば」の用法とを照らし合わせて見る。

築島裕編『訓点語彙集成』(汲古書院)によると、訓点資料における「しからば」と訓まれる漢字表記は、「斯」「然(則)」「(若)然者」「(若)爾者」である。筆者が調べた訓点資料^⑤には8例が見られ、その後続表現の内訳は表三に示すとおりである。

その中に、『日本書紀』に見られた「若」を含む例として、「若然者」「若爾」が6例見られる^⑥。

- (12) 使臣曰く若(し)然(ら)者何を以てか罪を雪めむ。(『興聖寺本大唐西域記』卷十二)
- (13) 若爾らば、……一切皆空なるべし。(『大東急記念文庫本大乘広百論釈論承和点』)
- (14) 法師(ノ)曰(ク)、「此(ハ)是(レ)他宗ナリ、我[未]曾(テ)見未、汝但説ケ、苦(シフコト)無(カ)レ」、彼カ曰(ハク)、「若(シ)然(ラ)ハ、夜中ニ至(ラ)ムト請フ、…」(『大慈恩寺三蔵法師傳』卷第四-401)

(12)の「若然者」は「もししからば」と訓み、侍従の提案を聞いて、「もしそうであるならば、何をもって罪を清めるのか」という〈疑問〉が続く例である。(13)は前件の「如説諸法實性都無、無性理中無二無説」という論説を受けて、「もしそれならば、……一切は皆空になるだろう」という〈推定〉が続く例である。(14)は法師の承諾に応じて、「もしそうならば、深夜に伺うことを願います」という意味で、自己の〈意志〉を表現する。

また、「然則」と「而即」の例もある。

- (15) 定慧と〔與〕福德と時(を)異〔(こ)ト〕ニ(し)、醇一化と〔與〕澆一風「イ、^{ウルホヘリ}澆」と運(音)殊なり。然(ら)ば則(ち)一一乗三乗の〔之〕駕、^{イツレ(か)}安―〔可〕以て其の轍ヲ〔を〕同(じくす)べけ(むや)〔哉〕(『大乘大集地藏十輪經序』(6))
- (16) 舊(に)は道士と名(づくる)こと其の言(音)、最勝なり。而(ら)ば即(ち)

- (10) 由吾在故，汝得建其大造之績矣。是時，大己貴神問曰，然則汝是誰耶。〈「……吾が在るに由りての故に，汝其の大きに造る績を建つこと得たり」といふ。是の時に，大己貴神問ひて曰はく，「然らば汝は是誰ぞ」とのたまふ。〉（『日本書紀』卷第一・神代上）
- (11) 若其實請，宜陽賜予。然則百濟，欲新造國，必先以女人小子載船而至。〈若し其れ實に請はば，^{ゆるしたまふまねしたま}陽賜予へ。然らば百濟，新に國を造らむと欲はば，必ず先づ女人・小子を以て船に載せて至らむ。〉（『日本書紀』卷第二十・敏達天皇）

(10)の前文は，相手が自分の功を誇る話である。それに対し，大己貴神が「それならば，お前は誰だ」と問うた，という内容で，〈疑問〉が続く。(11)は，日羅が作戦を伝授する話である。百濟人の「船三百艘をもって九州と交換してほしい」という九州侵攻の謀略に対して，「もしこれを本当に願ひ出たら，偽ってお与えなさい」という内容を受けて，「そうするならば，百濟が新しく国を作ろうと思って，必ず先に女や子供を船に乗せてやってくるでしょう」という〈推定〉が続く。

以上のように，『日本書紀』で「しからば」と訓まれる例は，「若然者」「然則」「然即」に見られる。全体的な傾向として，後続文は疑問表現と推定表現に偏っている。

ところで，『古事記』は『日本書紀』と異なり，「しからば」は「然者」「然」の訓読に見られ，後続文は意志表現と命令表現に偏っていた。このように，「しからば」と訓まれる漢字表現や後続文の傾向は異なっているが，一致する面もある。すなわち，『古事記』の「然者」と『日本書紀』の「若然者」は，強い因果関係を表し，後続文は意志表現，命令表現，疑問表現に用いる点では共通している。しかし，形式の面では相違点もある。『日本書紀』の「然者」は「若」と結合して用いられ，「もししからば」と訓まれる条件文の一部となっている。このような『日本書紀』の「若然者」の用法は，後述するように仏典の用法を取り入れたものと考えられる。それに対して，『古事記』の「然者」は「若」と繋がる例がなく，「然者」だけの形で接続詞として使われる。これは，日本語では「若」がなくても，「未然形+ば」で仮定の意が成立するためであると考えられる。この「然者」の形式は漢文には見られないものであり，『萬葉集』にもあった接続詞「しからば」を表していると考えられる。

3 訓点資料における「しからば」

前節では，上代文献における「しからば」の用法を考察してきた。「しからば」の後続文は，『古事記』では命令表現と意志表現に偏り，『日本書紀』では疑問表現と推定表現に偏ることがわかった。次に，中古の訓点資料における「しからば」の用例を整理し，

表二 『日本書紀』に見られる「しからば」

漢字 後続文	「若然者」		「然則（即）」		計
	文頭	文中	文頭	文中	
意志表現	1	0	0	0	1
命令表現	1	0	1	0	2
疑問表現	1	0	3	1	5
推定表現	0	0	1	2	3
計	3		8		11

2.2 『日本書紀』に見られる「しからば」

変体漢文といわれる『古事記』と異なり、正格漢文を志向する『日本書紀』は異なる様相を見せている。表二に示したように、大系本『日本書紀』で「しからば」と訓まれるものには、「若然者」3例、「然則（即）」8例が見られる。後件は「若然者」では意志表現、命令表現、疑問表現が各1例見られる。一方、「然則（即）」では疑問表現と推定表現に偏っている。

- (7) 時天照大神勅曰、若然者、方當降吾兒矣。〈時に天照大神、勅して曰はく、「若し然らば、方に吾が兒を降しまつらむ。」とのたまふ。〉（『日本書紀』卷第二・神代下）
- (8) 素戔鳴尊勅曰、若然者、汝當以女奉吾耶。〈素戔鳴尊、勅して曰はく、「若し然らば、汝、當に女を以て吾に奉れむや」とのたまふ。〉（『日本書紀』卷第一・神代上）
- (9) 天照大神復問曰、若然者、將何以明爾之赤心也。〈天照大神、復問ひて曰はく、「若し然らば、將に何を以てか爾が赤き心を明さむ」とのたまふ。〉（『日本書紀』卷第一・神代上）

(7)の前文は、二柱の神が葦原中国を平定したと報告したという内容である。それを受けて、天照大神は「もしそうであるならば、今まさに我が孫子を降臨させ申そう」と仰せられた、という内容で、〈意志〉を表明する。(8)の前文は、老人が素戔鳴尊に自分が泣いている原因を聞かせたという内容である。それを受けて、素戔鳴尊は、「もしそうということならば、お前は娘を私に献上してくれないか」という〈命令〉を下した。(9)は、素戔鳴尊が自分に「邪心はない」と表明したことを受けて、天照大神は「もしそうならば、何をもちてお前の潔白な心を明らかにするのか」と問うた、という内容である。「若然者」は相手の話を仮定的に受けて、相手に〈疑問〉を提示している。

また、次のように「然則」7例、「然即」1例があり、いずれも会話文の例である。

表一 『古事記』に見られる「しからば」

後続文	「然者」		「然」		計
	文頭	文中	文頭	文中	
意志表現	3	0	0	1	4
命令表現	5	0	2	0	7
疑問表現	2	0	0	0	2
推定表現	0	0	0	0	0
計	10		3		13

を殺せ。」とのりたまひき。〉(『古事記』下巻・履中天皇)

(2)は、須佐之男命が「異心なし」と表明したことを受けて、天照大御神が「それならば、おまえの心の清明なることはどのようにして知ろうか」と仰せられたという意味で、〈疑問〉を提示する。(3)は、須佐之男命が伊邪那岐大御神に怒られて、神やらいに追い払われたことを受けて、「それならば、天照大御神に申してから(根之堅州国)へ参ろう」という意味で、話し手の〈意志〉を表す。(4)は、曾婆訶理が「仰せのとおりに」と申し上げたことに対して、水齒別命が「それならば、お前の仕えている主君を殺せ」と言ったという意味で、相手への〈命令〉を表す。

以上のように、「然者」はいずれも相手の話を仮定的に受けて、相手に対する疑問や命令、或いは自己の意志を表す文を導き出す。

この他に、大系本『古事記』では、「然」一文字で「しからば」と訓まれる例もある。

(5) 如此白之間、其建御名方神、千引石擎手末而來、言誰來我國而、忍忍如此物言。

然欲爲力競。〈…撃げて来て、「誰ぞ我が國に来て、忍び忍びに如此物言ふ。然らば力競べ爲む。〉(『古事記』上巻・葦原中国の平定)

(6) 爾天皇詔、然隨命宜幸行。〈爾に天皇詔りたまひしく、「然らば命の隨に幸行でますべし。〉(『古事記』下巻・顯宗天皇)

(5)の前文脈は建御雷神と大國主神との対話であり、建御名方神がそれを聞き、「だれだ、我が国に来てこうひそひそものを言っているのは。」という発問に続き、「それならば、力比べをしようと思う」という内容で、自己の〈意志〉を表明する。(6)の前文は、天皇の兄である意禰命が天皇のお心に従って、父王を殺した大長谷天皇の御陵を破壊しようという話で、天皇が「それならば、あなたのお言葉の通りにお行きなさい」と仰せられた、という意味で、他人の行動に関して、勧誘的な〈命令〉の意を表わしている。

上記のように、『古事記』の「しからば」と訓まれるものは、疑問表現の2例を除いて、用例がほとんど意志表現や命令表現とかかわって使われることがわかる。

林 (1964), 築島 (1963) などでは, 上代において既に, 漢文訓読調という語調が形成されていたことを指摘している。しかし, この歌は作者未詳の東歌なので, 漢文訓読の表現が持ち込まれることは考えにくい。ただし, 1例しかないということは, 「しからば」の発生が比較的にな新しく, また, 歌語として定着していなかったことを示すものであろう。

このように, 「しからば」は漢文訓読のために作った語でなく, もともと日本語に存していたもので, 後に平安時代の訓点資料に定着するようになったのではないかと考えられる。そこで, 同じ上代の『古事記』と『日本書紀』において, 「しからば」と訓まれる漢字表記がどのような用法をとっているかを検討する必要がある。

2.1 『古事記』に見られる「しからば」

『古事記』においては, 「しからば」と訓まれる漢字表記「然者」が見られる。『古事記伝』『校本古事記』などでは, 「然者」をすべて「しからば」と訓んでいる。一方, 『古事記新訂版』と『日本思想大系 古事記』では, 「然者」を「しからば」と訓んでいるが, 『萬葉集』の仮名書きの例を踏まえて考えると, 「しからば」という接続詞は上代に既に成立していた可能性があり, ここで追究する上代文献における「然者」は「しからば」と訓む蓋然性が高いと考えられる。本稿では, 日本古典文学大系本『古事記』と『日本書紀』で「しからば」と訓まれる「(若) 然者」「然 (則)」の例を対象とする^③。

大系本『古事記』の訓読によれば, 「しからば」と訓まれるものが13例見られる。表一の示すように, 「然者」二文字で表記されるものが10例, 「然」一文字で表記されるものが3例見られる。全例が会話文におけるもので, 会話文頭に位置するものは10例, 会話文中に位置するものは1例のみである。また, 表一から, 「しからば」の後続文の特徴として, 疑問表現と推定表現が少なく, 意志表現と命令表現に偏っていることがわかる。

- (2) 故, 以爲請將罷往之状參上耳。無異心。爾天照大御神詔, 然者汝心之清明, 何以知。〈故, 罷り行かむ状を請さむと以爲ひてこそ參上りつれ。異心無し。〉とまをしき。爾に天照大御神詔りたまひしく, 「然らば汝の心の清く明きは何にして知らむ。」とのりたまひき。 (『古事記』上巻・天照大神と須佐之男命)
- (3) 故於是速須佐之男命言, 然者請天照大御神將罷。〈故是に速須佐之男命言ひしく, 「然らば天照大御神に請して罷らむ。〉 (『古事記』上巻・天照大神と須佐之男命)
- (4) 曾婆訶理答白隨命。爾多祿給其隼人曰, 然者殺汝王也。〈曾婆訶理「命の隨に。」と答へ白しき。爾に多に祿を其の隼人に給ひて日りやまひしく, 「然らば汝が王

上代の接続詞「しからば」の発生について

楊 瓊

1 はじめに

日本語の接続詞は中古においては未発達であり、漢文訓読の中で次第に定着していったという見方は、これまでの一般的な捉え方である^①と考えられる。ところが、上代の『萬葉集』では、次節で挙げるように、すでに接続詞と解される「しからば」の例が見られる。また、漢文、ないし変体漢文の『日本書紀』『古事記』においても、「然者」「然則」などのような「しからば」と訓まれる漢字表記を見出すことができる。管見では、「しからば」の本格的な研究は見られないが、中古日本語の段階でも、接続詞が未発達であったことを考えると、これらの上代の「しからば」の使用実態を考えることは大きな意味を持つてくる。そこで本稿では、まず、上代文献における「しからば」の仮名書きの例とその訓が宛てられる用例を挙げ、その用法を考察し、それらが漢籍・仏典の用法をいかに受け継いでいるかを検証することによって、接続詞「しからば」の発生について論じていく。

2 上代文献における「しからば」

本節では、上代文献における「しからば」の仮名書きの例とその訓が宛てられる用例を考察する。まず、『萬葉集』の歌において、唯一の「しからば」の例は次の仮名書きの例である。

- (1) 人妻と あぜかそを言はむ 然らばか(志可良婆加) 隣の衣を 借りて着なはも(『萬葉集』十四・3472)

上記の歌は、上の句で「人妻だどうしてそのことをいふのか」と問いかけ、下の句で「それならば、隣の人の着物を借りて着ないであらうか」と答える内容である^②。すなわち、「しからば」の後続文は、「人妻といはむ」ということを条件として受けて、「借りて着なはも」という強い疑問表現(ここでは反語の意)を続けているのである。

従来の研究では、「しからば」は漢文訓読の特有語として認識されている。また、小